

現代社会におけるレクリエーション概念の再検討

薗田 碩哉* 仲村 要**
 西野 仁*** 影山 健****
 小田切 育一*****

はじめに

現代社会におけるレクリエーション（以下レクと略す）の意義や必要性については、すでに我々は信じて疑わない。レクは今や誰の目にも、政治・経済・教育等とかかわる諸々の社会機構に、不可避的に組込まれたものになっている。……こうした現代の状況下にあっては、レクはまた同時に、研究・調査や学問の対象にも成り得ている。

【対象：レクリエーション概念】 では研究・調査や学問の対象にも成り得ている、時代的・社会的状況に根ざしたレクへの研究意図は、その対象概念であるレクにどの様に反映していると考えられるか。我々は以上の意味での、いわゆる研究対象としてのレクの概念の問題に、まず注目したい。

【方法：我国のレクリエーション研究への歴史的アプローチ】 現代におけるレク概念を再検討しようとする本テーマの課題を、我国のレク研究史を前提にした歴史的なアプローチによって達成したい。レク概念の今日的な問題状況に言及するために、いわば「過去との対話」を基調とする話題によって、レクの概念的変容にかかわる時代経過を明らかにしたい。

【仮説的な時代区分の設定】 我国のレク研究史の発展段階は、対象概念としてのレクの変容過程との関連でとらえると、およそ以下の三つの時期に区分することが可能であろう。すなわち第二次世界大戦以前。終戦から高度経済成長期（70年代初頭まで）。オイル・ショック期以降。

こうした時代区分の妥当性は、もとより我国のレク研究史に関する先行研究批判というかたちで検討され

るものであるが、これまでの研究成果は必ずしもそのためには充分ではない。そこで近代化の経過に伴なう英語名詞 *recreation* の概念的な変容にふれることによって、妥当な手がかりをつかむことにしたい。

【仮説の論拠：英語名詞レクリエーションの意味変容から】 オックスフォード英語辞典の用例に基づけば、15～19世紀末にいたる時代に、*recreation* の名詞には少なくとも三つの意味の系譜を確認出来る。すなわち①食事をとって腹ごしらえをする、滋養物をする。②慰安や心のなぐさめ、③気晴らしの方法や楽しい運動や活動、楽しみによる心身の刷新。（①は15世紀頃、②は17世紀頃には「廢語化」された。）

そしてこれらを引継いだかたちで、19世紀末から20世紀初頭以降に確認出来る新たな意味は、いわゆるレク運動に関わるものである。こうした意味での用例こそは、研究対象としての *recreation* の名詞の歴史的出発点に他ならない。この典型としてのアメリカにおける運動の展開に着目すれば、それは二つの意味的な系譜に大別出来る。

第一には、性格形成や発育発達や非行防止といった遊びの有用性（「価値の基準」に基づいた）に関する社会的コンセンサスの確立に伴なう系譜である。いわば教育学的・心理学的なアプローチから、行政管理学的アプローチへと展開した20世紀初頭に、すでに明確になった運動の側面でもある。

そして第二に、余暇現象や余暇行動の究明と関わる。いわば社会学的・経済学的なアプローチに近接する系譜がある。この系譜はむしろ「必要の基準」を基調とするもので、20年代以降の余暇活動とライフサイクル、余暇消費行動等への研究意図とかかわっている。この

* (財)日本レクリエーション協会

**** 愛知教育大学

** 同志社大学

***** 奈良女子大学

*** 東海大学

系譜はまた、60年代以降における行動科学論的な研究とも結びついていく。

運動に関わる英語名辞recreationの以上のような意味的な系譜は、基本的には日本語名辞レクリエーションの場合にも同様と考えられる。

【話題提供に向けて】 我国における運動とかかわるレクの概念は、第二次世界大戦前にさかのぼることが出来る。ではこの時期におけるレク研究の原点とも言うべき概念像は、どのようなものか。（→ 1.）

また運動とかかわるレクの概念は、第二次世界大戦後の時代的・社会的経過の中で、どのように展開していくか。また高度経済成長期に伴なう余暇現象や行動に関する諸研究とかかわって、概念はどのように影響を受けたか。（→ 2.）

さらに我国のレク研究や、その対象概念としてのレクは、外国（アメリカ）での今日的動向（行動科学論的研究等）からみて、どのような示唆を得るか。（→ 3.）

加えて我国の運動とかかわる概念は、今日的などんな問題状況におかれているのか。とりわけレクの「政治性」の諸相を、度外視出来ないであろう。（→ 4.）

1. 民衆娯楽の成立から国民娯楽への展開

レクリエーション研究の原点としての大正中期

レク問題が問題化するためには、大衆的な規模での余暇生活の享受が行なわれ、余暇のあり方が社会問題として意識されることが必須の条件である。日本においてその条件が熟するのは大正中期のことである。

日清・日露戦争を経て、日本資本主義は重工業の段階に到達し、第一次大戦による好況は生産力を一層拡大させた。都市には、それまでの職人階級にかわって「無産者大衆」（プロレタリアート）が登場し、中間層としての職員層（サラリーマン）も自己形成をはじめる。これらの新しい階級の政治的要求は、いわゆる大正デモクラシーを出現させ、またその文化的要求はモダンでハイカラな大衆文化を生み出した。

いわゆる明治維新による政治的近代化に次ぐ、文化的近代化の時代が到来した。文化的な面、生活の面では明治期というのは、殊に都市においては、文化文政時代以来に確立した町人・職人階級を担い手とする、いわゆる江戸文化（琴、三味線、落語）の時代であった。こうした意味では、明治期に洗練の度を加えた江戸文化は、ここで新興大衆文化の挑戦を受けることに

なった。そして明治末から大正期にかけては、映画（活動写真）、レコード、週刊誌、大衆雑誌、ラジオ放送などの新しいメディアが次々と出現し、大衆文化を作り出す原動力となった。

マス・メディアの出現と工場労働者の登場とが結びついたところに、「民衆娯楽」が大きな課題として浮かび上った。これが日本における「近代的レクリエーション」の最初の問題化だといえる。日本のレク学の原点として、この時期の社会と娯楽（レク）との関係を見えることは、欠かせない作業である。

大正中期の民衆娯楽論

娯楽問題の社会的コントロールは、民衆が新しい娯楽をつくり出すにいたった当時において、明確なものになった。また民衆娯楽には民衆の文化的な表現があるのでから、芸術のための純粋芸術ではなく、民衆のための民衆の芸術こそが大事だといった坪内の見解のように、民衆娯楽をどう見るかについての知識人の議論も生じたのである。（民衆芸術論争、大正5年）

こうした時代状況を背景に、時代に先駆けた最初の論考『民衆娯楽問題』が、権田保之助によって刊行されたのは大正10年のことであった。そして大正10年代には、後述するような種々の娯楽（レク）研究が世に出ることになった。

ところで当時のレク問題は、およそ次の三つの視点から論じられたといえる。第一は、労働者階級の「余暇」の実態についての社会政策的な視点からの検討である。大林宗嗣の『民衆娯楽の実際研究』（大正11年）や、大阪市社会部による『余暇生活の研究』（大正12年）はこの代表であるが、前者においてはアメリカのパトリックのレク理論から明らかに影響を受けており興味深い。

第二の視点は「民衆娯楽」の統制や娯楽教育の必要性など、教育政策的な視点からの検討である。橋高広の『現代娯楽の表裏』（昭和3年）や中田俊造の『娯楽の研究』（大正13年）はこの代表であり、いわば余暇善用論的問題意識をもった娯楽論といえる。

そして第三の視点は、労働者階級の文化的自己形成としての「民衆娯楽」という、社会学的視点からの検討であり、権田保之助に代表される。彼の視点は善悪以前に、どんな民衆娯楽がどんな風に民衆によって出てきたかを、客観的に明らかにすべきだとする見地が明白である。

権田にみられる国民娯楽論への転向

大正10年代以降の民衆娯楽の研究の中では、権田の仕事が特に重要な論点を提出している。彼は大正期の「民衆娯楽」論の中では、娯楽を「生活美化」の欲求にもとづく「自目的」で「過程を重視する」活動と定義し、これを「生活を維持する」欲求にもとづく「多目的」で「結果を重視する」活動として、労働の概念の対極に位置づけている。彼は娯楽の統制や教育的利用を否定して、その自然な成長を見守ることを主張している。彼の娯楽学説批判の中で、再創造（レクリエーション）説批判はとりわけ印象的である。

にもかかわらず権田は、昭和期に入ると論点を変え民衆娯楽の「崩壊」を述べて「国民娯楽論」を展開する。こうした変化は『民衆娯楽の崩壊と国民娯楽への準備』（昭和10年）を中央公論に書いてから明白になり専ら国民娯楽という言い方で、かつて激しく否定した娯楽の教育的活用を認め、また強調するようになつた。こうして余暇善用と健全娯楽の奨励を説く、「厚生運動」の理論家の第一人者として活動をするようになった。

権田の「転向」ともとれる以上の変化の背景には、大正デモクラシーから昭和のファシズムへと大きく転回する社会と政治の圧力があったことは容易に想像される。しかしながら民衆娯楽と国民娯楽とは、権田においてはもとより必ずしも全く対立する考え方ではなく、むしろつながり合うものである。

娯楽というのは一面では民衆の自発性への表現であって、それはそのままいわば肯定されるものであるがしかし真に心から樂しまれる娯楽というのは、深い教育的価値を持っているものであり、これもまた否定出来ないのである。

「レジャーとレクリエーションの相補関係」からこうした民衆娯楽と国民娯楽との関係を、現代語に翻訳すれば、いわばレジャーとレクとの相補的な関係として、あるいは両者の言葉が意味する振幅として理解することが出来る。民衆娯楽はある意味では、レジャーという民衆の自由な表現としての娯楽を意味しており、レクとはその娯楽からいわば価値あるもの（体制にとって）を引き出すような、娯楽に対する姿勢として考えることが可能である。

最後にレクを余暇善用という、「善なるもの」の枠にだけ閉じめることには、問題があろう。結局戦前の国民娯楽論者（権田、大林、中田等）は、娯楽をもって戦争に加担せざるを得ないような状況に落込んで

いった。レクがこうした戦争の体制を支えるものになっていたように、価値志向的な娯楽のとらえ方はその歴止めにはならないのである。

我々のレク学というのは、いわば上記の意味でのレジャーを含んだものである。言いかえれば「かいなき遊び」から「うしろめたい遊び」までも含めた、娯楽という広い活動全体を見つめながら、それと社会とのかかわりをきびしく問い合わせていく。こうしたことの中にレク学の意味が問われるのではないかと思う。

2. マス・レジャーの中のレクリエーション論

戦後以降の三つの時代把握

第二次世界大戦以降から高度経済成長期が終った1973年までの時期を、年代的に整理すれば、およそ次のようになる。すなわち1945～55年の10年間におよぶ、「混乱—復興期」、そして55年～60年にかけての「成長期」、さらに60年～73年におよぶ「高度成長期」。（加えて73年以降を「低成長期」とみなしえる。）

これらの年代を通じて欲求充足にかかる人間の生きがい等への志向は、順次高度化されてきたといえる。すなわち「混乱—復興期」あたりでは、むしろ生きるのに精一杯といった Vital Needs が最も一般的なレベルであった。それが「高度成長期」を契機に、いわゆる物質的な欲望とかかわる Material Needs にそして更には Cultural Needs へと移行した。

これらの年代に対応するレクとしては、まず「混乱—復興期」ではG. H. Q. 民主化路線による、社会教育的な意味でのレクが一般化した。一言で「歌って、踊って、恋をして」といった、教育的・集団的な気分転換は、余暇生活が充実しているとか余暇時間が多いというのとは無関係な、政策的な配慮に伴なう新しい生き方への啓発を意味したように思われる。

こうした時期を引き継いで「成長期」に至って、産業優先の時代下で職場レクが台頭した。これは経営とか労務管理の延長線上で、レクが活用されたことを意味するものである。当時のアメリカにおいて、いわば人間関係論ともいるべき分野が経営論的発想の中で脚光を浴びたことも、我国の職場レクに無視出来ないことであった。

ところで「高度成長期」には、いわゆる大衆余暇（マス・レジャー）的時代状況が、明白なものになった。いわゆるコマーシャル・レクの現象が肥大化するなかで、むしろレジャーと言う言葉がそれにとって代

わる時代を迎えたのである。以上のようなレク現象の推移を背景に、では研究対象としてのレク概念は、どのように変化したのであろうか。

労働再生産論から人間性回復へ

この時期におけるレク概念は、一言で「労働再生産論的レク論」から、「人間性回復論的レク論」へと移行する、この時期固有の研究視野の広がりとかかわっている。

我国の場合、娯楽否定論、娯楽教化論、余暇善用論と続く一連の思想的背景を通じて、常に「労働のため」に有効で役に立つ、という場合にのみ消極的に認知された「遊び」の姿がある。いわゆる遊びに関する余暇善用論の系譜は、レクの戦後における定着過程にも、根強く引き継がれていた。

1945～55年代は「現代のレクリエーションの根本的意義は、生産活動、職業活動への能率強化のため、心身の疲労の“復旧現象”(rehabilitation)あるいは“回復現象”(reclamation)という点にその焦点がある。即ち現代のレクリエーションは現代の生産、職業、労働との関連において意義されている」というようなレクの定義が、その主流を占めていた。

ところが1960年以来のいわゆるマス・レジャー時代の到来は、急激に増大したレジャーの独立存在性の故に、旧来の労働再生産論的意味のみでレクを定義することを困難にした。すなわちマス・レジャーの現実の中では、人間生活における余暇活動としてのレクの有効性を説明する理論としては不充分になり、いわゆる人間性回復論的などころまでその概念が拡大されたのである。

レジャーとレクリエーションに関する三つの論議

マス、レジャー時代におけるレク概念の拡大が、レジャーの現実と相まってレクの没価値的な定義づけにまで展開し、実際の言葉の使用状況とも関連して、両者の異同についての論議を呼びおこすに至った。

この時期におけるレクとレジャーをめぐる論議は、次の三つにまとめることが可能である。そのひとつはレジャーとレクとの峻別論である。これは文字通りレジャーとレクを概念的に区別しようとする。この場合レクを価値志向的性格（余暇の賢明な活用等）でとらえ、レジャーを没価値的な性格（余暇に行なわれる全活動、時間等）でとらえようとする主張が、最も一般的である。

なおざりにされたままの概念論

第二の論議は、レジャーとレクとを補完的もしくは相補的関係としてとらえるものである。ここではレジャーとレクは、広い遊びの世界における補完的、相補的作用や機能（ベクトル）とみなされる。たとえばこれは、労働再生産のベクトル（＝レク的）と遊戯文化創造のベクトル（＝レジャー的）とからなる「遊びの世界」を前提とする。

第三の論議は、第一の峻別論の変型とも言えるものだが、むしろレジャーの側からその概念の現代的優位性を強調するものである。これはレクを生産や労働に帰属する下位概念（「近代余暇」の概念）とみなすのに対し、レジャーを生活全体に「ゆとり」や「豊かさ」をもたらす上位概念（「現代余暇」というべき概念）とみなすものである。

なおざりにされたままの概念論

以上のようなレジャーとレクをめぐる論議は、「低成長期」の時期以降になって、むしろ放棄されたままになっているように思われる。とりわけレクの価値と結びついた概念論は、今日的な時代推移に対応する新たな論拠を不毛のままに残しているように思われる。

1972～3年当時に筆者が行なった調査「日常用語としてのレジャー、レクリエーション」によれば、日本語としてのレジャーとレクとは、実際には大変近似した価値列の高い概念で使用されている。そこではレジャーを時間的な没価値的な概念とみなし、レクを活動的な概念とみなす峻別論は、すでにその論拠をあいまいにさせている様にも思われる。

新たな時代的要請を見すえて概念論を構築してゆくことが、学会の急務ではないかと考えている。

3. レジャー・レクリエーション研究の動向とその概念の変遷（とくに1970年以降）

アメリカにおける研究の動向から

アメリカにおける研究動向は、前述の我国の動向を見定める上で、ひとつの示唆を与えるように思われる。バートンの『レジャー研究の成熟』によれば、アメリカにおける戦後のレク研究は、「幼児期」（1950年前後）、「少年期」（1960年前後）、「青年期」（1970年前後）、「成人期」（1980年前後）の各段階に分けられる。

「幼年期」とは、親学問である社会学、経済学、教育学等の研究の副産物として、レジャー・レクがあつかわれた時期である。「少年期」とは、親学問の方法をそっくり借りて、レジャー・レクの研究を行なった

時期である。そしていわゆる親学問からの学問離れが始まったのは、ORRRC（野外レク資源調査）等が行なわれた「青年期」からである。

「青年期」には、レジャー行動パターンの発見や、人口統計的変数や社会経済的変数との関係、レジャー施設やサービス・プログラムについての研究が、多変量解析の手法を用いて行なわれた。そして「成人期」には、親学問から離れ独自の道を歩むための論議が盛んになった。たとえばレジャーやレクの独自性の論議また研究の役割や存在理由にかかわる問い合わせ等がそれである。

こうした動きは、たとえばイリノイ大学における Leisure Behavior Research Laboratory の設置にも明らかである。この研究所は従来のレク管理中心の学科から、レジャー研究学科への名称変更にともなって設置された。ここでは従来の社会学分野からのスタッフばかりでなく、心理学、文化人類学、経済学などより広範囲な分野からの専門家が集められ、社会心理学（社会学）的視点からのレジャー行動についての知識を獲得することや、レジャー時間での活動やスポーツにおける子供や大人の遊びあるいは運動行動の研究に力点が置かれている。

人のレジャー行動のメカニズムをさぐろうとする行動科学的視点からの研究が中心であるといえよう。

行動科学的視点とレジャーの諸概念

以上のように、行動そのものを研究していくとするとらえ方が、70年代以降大変強くなっている。そしていわゆる行動科学的アプローチを前提とした、新たなレジャー概念設定のこころみがなされている。

たとえば Kelley と Newlinger は、選択の自由性が高いか低いかということと、動機や内発的 (Intrinsic) か外発的 (Extrinsic) かということで、レジャーを規定する枠組をつくってみてはどうかと提案している。Kelley の場合はレジャーを活動概念として、また Newlinger はレジャーを state of mind とみなす視点を、従来から持っていた。

Iso-Ahora は社会心理学的な方法によってレジャーの概念規定の実証的研究を行ない、上述の動機の内発的—外発的等を、レジャーの認識の決定要素としてとらえている。その他 Roberts は、レジャーを「比較的自己決定されるノン・ワークな活動」としているし、Gordon は「手段的なテーマを越えて、その中に意味をこめた自由に選択できる個人的活動」として、

行為の面から概念化出来ると述べている。

こうしたいくつかのレジャーの概念設定に触れてくると、レジャーは今日の研究では仕事に対立する概念というより、むしろ仕事を含めた総合的概念とみなされている点が興味深い。Murphy によればレジャーの概念は、歴史的に「強制=義務」としての仕事の倫理と、その対極としての、「自発的=自己決定」としてのレジャーとの間でとらえられてきたという。その強調すべき度合によって、自由裁量、時間的、社会的手段、社会階級的、伝統的な様々な概念づけが行なわれてきたというとらえ方である。最近の傾向としては、この仕事とレジャーの混合ともいえる Holistic (全体的) なとらえ方が、強くなってきているといえよう。

日本の現状とのかかわり

こうした最近のアメリカにおけるレジャーの概念の方向性は、我国においても見つけることが出来る。たとえば余暇開発センターが、「ライフ・システム」論的な体系の中で規定したレジャーの概念等は、これに相当する。とはいえたこの種のレジャーの概念は、たとえば Gunter の指摘するような、「嫌悪」と結びついた「疎外された」「アノミックな」レジャー形態までも含んでいない。このことは我国のレジャー研究の、「若さ」とかかわるようと思われる。

ところでこうした傾向の中でのレク概念については Kelley らの「個人的、社会的利益が期待されるレジャー」という規定がある。これはアメリカが行政的なレク・プログラム・サービスを中心としているという社会的背景と無関係ではない。ここではレジャーの概念をどう規定していくか、そしてレクの条件としての「規待される利益」の内実をどう見定めるかが、課題とされよう。

期待される利益は、社会とともに変化する。社会の変化に伴なった動的なとらえ方の中で、レジャーとレクの相補性や補完性についての、より論理的で科学的な検討のつみあげも必要とされよう。

4. 現代レクリエーションの政治的性格について（新しいレクリエーションの概念を考えるために）

はじめに

レク概念を再検討する場合に、現代社会においてレクがどのような問題をもっているかを考えることが必

要である。このことは現代社会におけるレクの役割の検討、すなわちその“政治”とのかかわりについての考察を重要なものとさせる。

はじめに私自身のことを少し述べると、現在私は、いろいろな市民運動——正確には一般に市民運動と称されている活動——に参加している。たとえば管理主義教育に反対する入浜権運動、スポーツの現状に異議を申し立てる反オリンピック運動等々がそれである。

ところでここで指摘しておきたいことは、私にとってはこれらの市民運動に参加することが、レクになっているということである。もちろん市民運動は、労働でもなく、またいわゆるレジャーでもない。しかし、創造やパロディを含むユニークな世界である。

けれども、レクの研究や実践では、これまでこのような世界を一般にレクの概念からシャットアウトしてきたように思われる。そのような思考状況が現在のレク運動の低迷をもたらしてきたように思われる。

「政治——権力」の視角

さて現代レクの政治的性格を考える場合、“政治”とは何かということがまず問題になる。政治とは、一般に権力の行使あるいは発現として考えられているが政治あるいは権力という概念は、最近では一般に広義に解釈される傾向にあることに注意する必要がある。たとえばM.ウェーバーは、権力を「個人ももしくは集団が抵抗に逆らってまでもその意志を実行することの出来る蓋然性」と定義し、P.バーガーらは「自分が実際にはしたくないことをすること」を権力の経験として述べている。私もこれらに従事する、政治や権力という概念を広義に解釈している。

したがって政治という現象は、単に国家権力の直接的行使というフォーマルな側面だけではなく、文化やイデオロギー操作・管理による支配という、インフォーマルな側面を含むものとして考えている。産業化し複雑化してきている現代社会においては、とりわけ後者の意味における政治や権力の関係ということが、明らかに重要になってきている。L.アルチュセールが、国家による支配の装置を、抑圧的な国家装置とイデオロギー的国家装置に分けて考察しているのは有名である。

現代レクリエーションの政治性

レクをこのような政治——権力的視点から考察しようとすると、とりわけレク活動における管理化の進行ということが問題になってくる。管理化ということは

換言すれば権力とのかかわり合いが、より密接化していくことを意味しているからである。

レクの分野において、どのように権力化や政治化が進行しているかについて、ここではスポーツ活動を中心検討してみる。それを構造的側面と機能的側面とに分けて考えると、構造的側面ではレクと呼ばれている活動が、現在どのような時間的あるいは空間的、制度的な場において行なわれているかがまず問題となる。そして労働と余暇との分離の問題や、場所その他における産業化の進行等の問題が、そこから浮かび上ってくる。たとえば子供達が、川へ遊びに行くことを禁止される一方において、釣り堀があてがわれるといった現状は、レク活動の管理化を象徴的に示している。

レクの管理化は、このほか活動様式の画一化とか、レク概念のイデオロギー性をめぐる問題、あるいはレク研究の専門化をめぐる問題（=部分的合理性の追求）等々にも見られるところである。

このようなレクの変容は、レクの社会的役割にも重大な変化をもたらしてきていると考えられる。すなわち現在のレクは、労働と余暇といった産業社会の基本的しくみを、内部的に支えていく役割をいや歓なしに担うことになる。管理化された今日のレクでは、人々は十分な満足を得ることはない。そのため現代人の間では、一種の慢性的「レクリエーション飢餓」の状態が生じてくることになる。これに対して国家や産業は人々の欲求に応えるという形で、関与=干渉を一層増大させていく。このようなメカニズムにより、個人の「不能化」とレクの体制補完機能は、一層促進されていくことになるのである。

新たな文化運動をめざして

このようなレク状況をどう克服していくかは、現状レクの課題である。1980年代の大きな特徴は、スポーツに反対する市民運動が生じてきたことである。東海地方で起った1981年の名古屋オリンピック誘致反対運動や、1983年の高校総体反対運動など。これらは、競技スポーツあるいは組織化されたスポーツへの反対であるが、スポーツのもつ政治性やその権力迎合性に対する批判である。

しかし反面、新しい文化運動がスポーツの世界においても生じてきている。たとえば、T. Orlick の Co-operative Sports や、S. Brand らによる New Games 運動など。我々も最近 Trops 運動を提唱しているが、これは文字通り旧来の Sport を逆転させ

るもので、権力化し管理化したスポーツへの批判である。

ところでこれらの運動は、単に新しいスポーツのための運動だけではない。トロップス運動は現代社会において、より自律的で共同的な世界の確立をめざす市民運動から生まれたものである。すなわちトロップス運動は、何よりも市民的生活様式の拡大と復権を目指す運動でもあるのである。

おわりに

レクの管理化や政治化は、様々な要因で絡み合って生じたことである。その中でとりわけレクの概念化をめぐる問題は大きいと思われる。前述したように、これまでのレク研究では、市民運動のようなものをレク概念の外に置いてきた。その点でレク学会の責任は大きいといえよう。

レク運動の活性化を図るためにには、レクの概念それ自体から見直していくことが必要である。新しいレクの概念の構築においては、より社会的視点を持つことが重要になってきている。具体的には、労働と余暇との再統一の視点をもつこと。換言すれば、市民運動のようなものこそ本当のレクであると考えられるような概念を、構成してゆくことが重要なのである。

主要参考文献

- 「権田保之助著作集」(全四巻), 文和書房, 1974~75。
- 日本人と娯楽研究会(編), 「権田保之助研究」第一号, 第二号。
- 菌田頼哉, 「遊びの構造論」不昧堂, 1983。
- 菌田頼哉, 「レクリエーションの構造論」, レクリエーション研究, 第一巻, 第一号, 1970。
- 小田切毅一, 「レジャーとレクリエーションの補完関係——“現代批判”のための問題提起——」(財日本レクリエーション協会編, 現代とレクリエーション——体系I——, 不昧堂, pp. 240~248。)
- 中村要, 「日常用語としてのレジャー・レクリエーション」(同上書, pp. 227~228。)
- 江橋慎四郎, 池田勝, 「レクリエーション研究序説」(同上書, 体系III, pp. 11~25, pp. 74~87。)
- 池田勝, 「アメリカにおけるレクリエーション研究の動向」, 体育の科学, 1969, 7~8号。
- 団琢磨, 「レクリエーション研究の動向」, 体育の科学, 1964, 4月号。
- 津金沢聰広, 「戦後日本の『大衆芸術・娯楽』研究の動向」, 関西学院大学社会学部紀要, 1964。
- 小田切毅一, 「わが国の戦後におけるレジャーとレクリエーションの論議の検討」(丹羽劭昭編著, 戯劇と運動文化, 道和書院, 1979, pp. 183~224。)
- 前川峯雄, 「レクリエーション」, 教育科学社, 1949。
- 影山健, 「体育・スポーツと権力」, 『アンチオリエンピックス』No.2, 1981。
- L. アルチュセール, 西川訳, 「国家とイデオロギー」, 福村出版, 1974。
- M. フーコ, 渡辺訳, 「哲学の舞台」, 朝日出版社 1978。
- 向井守他, 「ウェーバー支配の社会学」, 有斐閣新書, 1979。
- P. バーガー&B. バーガー, 安江訳「バーガー社会学」学習研究社 1979。
- Kelley, J.R., Leisure, Englewood Cliss, Prentice-Hall, 1980.
- Murphy, J.S., Concept of Leisure : Philosophical Implication, Prentice Hall, 1974.
- Neulinger, J., The Psychology of Leisure, Ch Charles C. Thomas, 1981.
- Burton, L.T., The Maturation of Leisure Research. (in Goodale & Witt (Ed.), recreation and leisure : issues in an era of change, Bencher Pub., Pennsylvania, 1980.)